

# 社会情報学部新カリキュラムについて

— カリキュラム検討委員会最終答申 —

大國 充彦・小内 純子・佐藤 和洋・千葉 正喜・長田 博泰

## I はじめに

札幌学院大学社会情報学部は2001年4月から新カリキュラムを開始する。カリキュラム案は2000年3月の教授会で承認され、同年7月、新設免許教科「情報」の申請にともなう若干の改訂をへて、細目の検討もすべて終了した。その具体的内容は学則、履修要項等に盛込まれ、あとは実施をまつばかりである。その意味では、カリキュラム編成の考え方、方針等を報告した最終答申はすでにその役目を終えた。

しかし、カリキュラム編成で肝要なことは、何よりもその考え方や方針、いわゆる哲学であろう。当面する現実に対処し、なおかつ将来を展望しうる新たな考え方、方針を見出すことが必須であり、その際、カリキュラムの根本をたずね、当時の状況に立ち戻って考えることも少なくないように思われる。しかし、多忙な日常の中で当初の考え方は得てして忘れ去られ、ひとの移り変わりとともに、一層判然としなくなる。だとすれば、その考え方や方針等を記録することは、裨益するところ大であろう。

ここに、カリキュラム検討委員会最終答申を録し、今後のカリキュラム検討に資する。採録に際し、2000年7月改訂にともなうカリキュラム編成、履修モデル案等を補綴した他

は2000年3月教授会最終答申のままとした。

## II カリキュラム検討委員会最終答申

2000年3月13日

社会情報学部カリキュラム検討委員会

### 0 経過

1999年6月社会情報学部教授会においてカリキュラム検討委員会の設置が決定され、つぎの委員を選出した。

大國充彦、小内純子、佐藤和洋、千葉正喜、長田博泰

委員会は委員長に長田教員を選出し、カリキュラム改訂が焦眉の急を要するとの判断から、2000年3月答申の教授会承認を得た。以後、別紙5（略）の審議を経て、ここに最終答申する。

### 1 カリキュラム編成

カリキュラムの骨子と具体案、科目群と科目概要および履修モデルを掲げる。

#### 1.1 カリキュラム編成骨格

カリキュラム編成の基本的考え方と概要を図1、2、3に示す。図1はカリキュラムが問題のありかと方法を学ぶ系列を経緯とし、その交叉上に多様に展開することを示す。図2は図1がゼミナールを中心にリテラシ科目、全学共通科目、専門基礎科目、専門科目の積み上げとして構成されることを示す。図3は図2を履修モデルで展開したものである。

OHKUNI Atsuhiko 札幌学院大学社会情報学部  
ONAI Junko 札幌学院大学社会情報学部  
SATOH Kazuhiro 札幌学院大学社会情報学部  
CHIBA Masaki 札幌学院大学社会情報学部  
NAGATA Hiroyasu 札幌学院大学社会情報学部

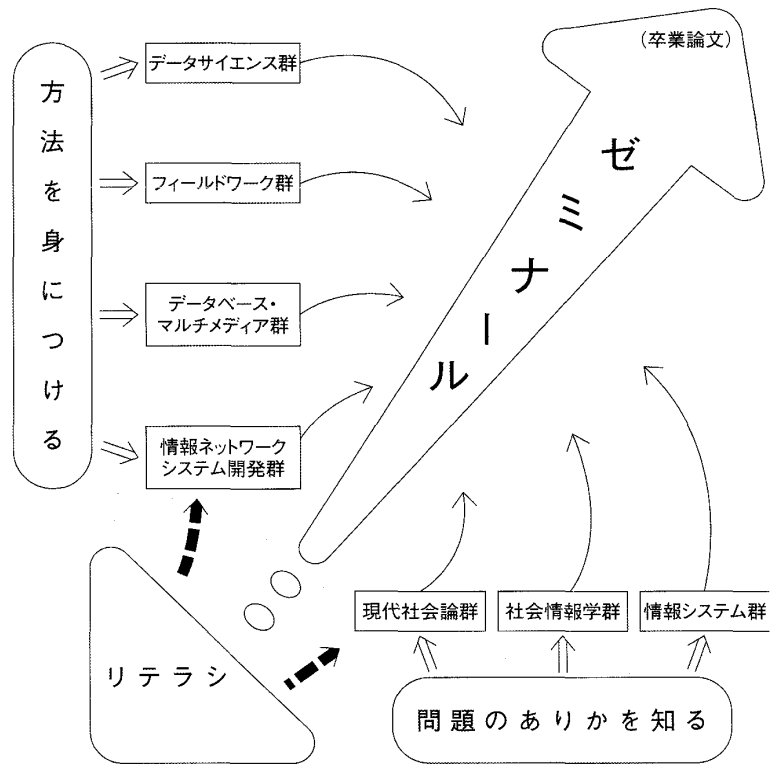


図1 カリキュラムの骨格

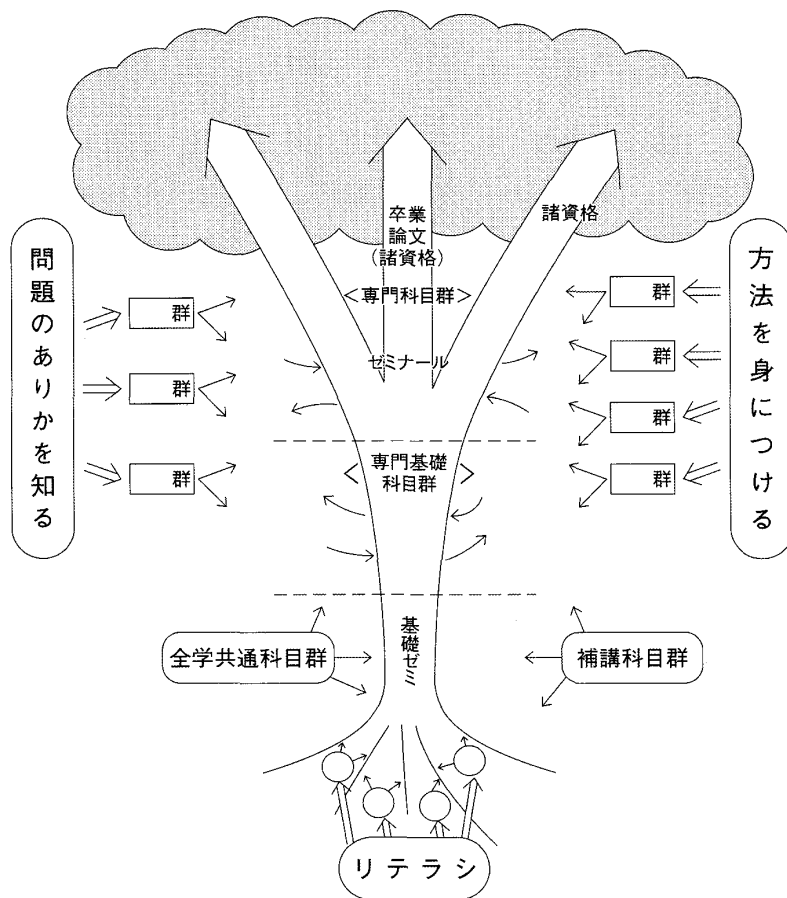


図2 科目群の積上げ

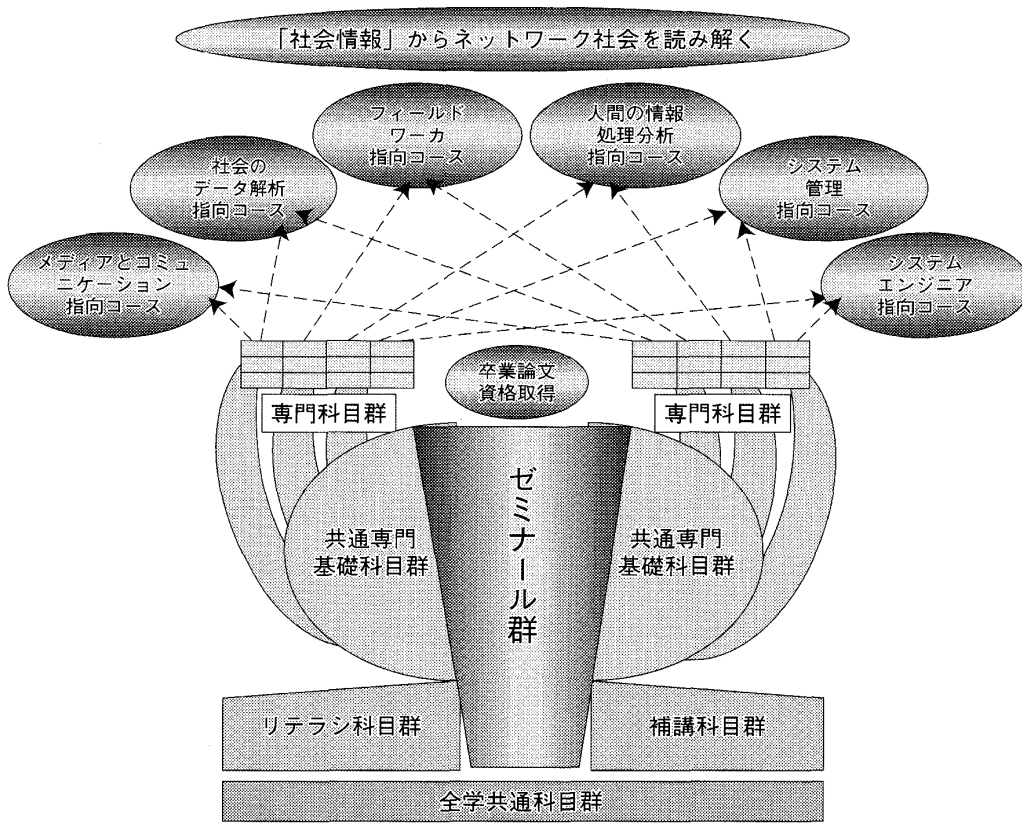


図3 カリキュラムの全体像

1.2 カリキュラム編成

新カリキュラムの科目名称及び配当学年について

科目群名	配 当 学 年							
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年	
	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期
セミナー	基礎ゼミナールⅠ	基礎ゼミナールⅡ		専門ゼミナールⅠ 専門ゼミナールⅡ	専門ゼミナールⅢ	専門ゼミナールⅣ		
リテラン	情報処理基礎 情報処理基礎演習 社会とコミュニケーション 社会と情報	データ解析基礎 データ解析基礎演習						
データサイエンス		量的調査方法論 量的調査基礎演習	データ解析 データ解析演習	量的調査設計 量的調査演習				
フィールドワーク		資料収集法 社会調査の技法と実際	質的調査方法論 質的調査基礎演習	質的調査設計 質的調査演習				
データベース・ マルチメディア		データベース基礎 データベース基礎演習	データベース設計基礎 データベース設計基礎演習	基礎コンピュータグラフィクス論	情報ベースシステム論 応用コンピュータグラフィクス論 マルチメディア処理演習	データベースシステム特論 知能情報基礎論 情報メディアシステム論		知能情報特論
情報ネットワーク システム		プログラミング プログラミング演習	データ構造とアルゴリズム論 データ構造とアルゴリズム論演習	マルチメディア処理論 情報通信ネットワーク論	情報ネットワーク演習 オペレーティングシステム論	ネットワークプログラミング論 システムプログラミング論		情報ネットワーク特論 ソフトウェア設計・開発論
社会情報学 (社会心理) (メディア) (社会情報学) (トピック科目)		コミュニケーション論Ⅰ	コミュニケーション論Ⅰ 認知行動論 メディアコミュニケーション論Ⅰ 社会情報学Ⅰ 現代メディア論	比較プログラム言語論 コミュニケーション論Ⅱ 認知科学	メディアコミュニケーション論Ⅱ 社会情報学Ⅱ 地域メディア論	情報空間論		
現代社会論 (社会システム論) (トピック科目)	現代社会の基礎 人間論の基礎	近代社会の基礎 社会生活論	社会システム論Ⅰ 情報社会論	社会システム論Ⅱ 情報と職業 地域社会論				
情報システム (情報システム論)		情報システムの基礎	システム事例調査	システム基礎論	コミュニケーション基礎論	システム応用論		コミュニケーション応用論
卒業論文						卒業論文		(卒業論文)
補講科目	基礎数学Ⅰ 情報数学Ⅰ	基礎数学Ⅱ 情報数学Ⅱ						
特別講義				社会情報学特論A 社会情報学特論B				

※ 単位数は、卒業論文のみ6単位とし、その他の科目はすべて2単位科目とする。

## 1.3 社会調査士カリキュラム

## 1. 目的

- ① 社会科学的視点にたつて社会調査の立案・計画・実施・分析ができるような総合的な力を養成する。
- ② 公共部門および民間部門で各種の社会調査活動を担う人材を養成する。
- ③ 社会調査の専門的な知識と技能を系統的に習得する。

\* 以上のような力量を身につけたと評価できる学生に対して、学部として資格を与える。

## 2. カリキュラム

・社会調査士の資格取得のためには以下の単位を修得すること。

## 【資格要件科目】

## 《指定科目》

- |      |                                      |                |
|------|--------------------------------------|----------------|
| 1 学年 | 資料収集法, 社会調査の技法と実際                    | (4 単位)         |
| 2 学年 | 量的調査方法論・演習 I, データ解析・演習, 質的調査方法論・演習 I | DB 基礎, DB 基礎演習 |
|      |                                      | (16 単位)        |
| 3 学年 | 量的調査設計・演習 II or 質的調査設計・演習 II         | (4 単位)         |
| 4 学年 | 卒業論文(調査論文 A or 調査論文 B)               | (6 単位)         |

<計 30 単位>

## 《選択科目》

- |               |        |
|---------------|--------|
| 社会情報学群から 4 科目 | (8 単位) |
| 現代社会論群から 4 科目 | (8 単位) |

<計 16 単位>

\* 選択科目数については、取得単位数の全体的調整の関係で変更もありうる。

\* 指定科目 + 選択科目 = 46 単位

(備考) 全学共通 36 単位

学部必修 24 単位

社会調査士資格要件科目

46 単位

計 106 単位

## 3. 認定方式

- ・資格認定は「単位修得+論文審査方式」で行う。
- ・調査論文の審査は、調査論文 A と調査論文 B の担当者 2 名で行う。

## &lt;参考資料&gt;

## 1. 他の実施大学の状況

## ① 関西学院大学

- ・1995 年度より実施 認定方式 = 単位修得
- 2000 年度より改定版の実施
- ・カリキュラム 14 科目 34 単位
- ・認定実績 1995 年度 2 名, 96 年度 3 名, 97 年度 3 名, 98 年度 1 名, 99 年度 0 名

## ② 奈良大学社会学部

- ・1995 年度より実施 単位修得
- ・カリキュラム 40 単位
- ・認定実績 1998 年度前期 6 名 後期 10 名 (1 学年約 240 人)

## ③ 桃山学院大学社会学部

- ・1996 年度より実施 単位修得+論文審査方式
- ・カリキュラム 40 単位
- ・認定実績 1998 年度 3 年次終了時認定 2 名

## ④ 四国学院大学社会学部

- ・1996 年度より実施 単位修得
- ・カリキュラム 60 単位
- ・認定実績 1996 年度 17 名, 1997 年度 27 名, 1998 年度 10 名 合計 54 名 認定率 15.0%

## ⑤ 大阪大学人間科学部

- ・1996 年度より実施 単位修得
- ・カリキュラム 40 単位
- ・認定実績 1998 年 3 月末現在 学部生 2

名, 大学院生 1 名

### ⑥ 立命館大学産業社会学部

- ・1998 年度より実施 単位修得+論文審査方式
- ・カリキュラム 40 単位
- ・認定実績 受講者数 1998 年 10 名 1999 年 17 名 受講率 10~17/900 人 (1.1~1.8%)

## 2. 日本社会学会での取り組み

- ① 1999 年度日本社会学会において, 社会学教育委員会の企画による社会調査士資格に関わる特別部会を開催.
- ② 特別部会報告に対する意見募集後, 社会学教育委員会にて協議中.

## 2 科目群と科目概要

科目群および各科目の概要を示す. また, 科目によっては, テキスト/参考書例を掲げ, その具体的内容の例示とする.

### 1 必修科目群

最小限の(情報)リテラシを実際的に学ぶとともに, セミナールをとおして自分で問題を設定し, そのために必要な資料収集, 分析によって問題を解決する能力を身につける. さらに, その結果に基づき, 自らの主張を形成し, 人とコミュニケーションする.

#### 1.1 ゼミナール

- ① 基礎ゼミナール I
  - ・自分の関心あるテーマを設定し, これについて資料を調べ, 報告し, 討論する.
  - ・教育形態等は現行に準拠
- ② 基礎ゼミナール II
  - ・自分の意見を論理的に整理, 発表し, まとめる.
  - ・教育形態等は現行に準拠
  - ・考書: 木下 是雄『レポートの組み立て方』ちくま学芸文庫 1994 年
  - 野矢 茂樹『論理トレーニング』産業図書 1997 年

### ③ 専門ゼミナール I, II, III, IV

- ・専門ゼミ I, II では, 専門的基礎知識を学ぶ
- ・専門ゼミ III では自分で課題を設定し, これを完成する
- ・専門ゼミ IV で課題をまとめ, 発表する

## 1.2 リテラシ

### ① 社会とコミュニケーション

- ・様々なコミュニケーション形態—電話, マスメディア, 電子メディア等が利用される中で, コミュニケーションの実態と意義を改めて考え直し, 自己内, 人—人, 人—組織, 人—社会における一層豊かなコミュニケーションが行われるために問題点を探る.

i) 人間のコミュニケーション

ii) 自我とコミュニケーション

iii) 出会いのコミュニケーション

iv) 集団・組織のコミュニケーション

v) 集団行動・社会運動のコミュニケーション

vi) メディアの歴史

vii) マス・コミュニケーション

viii) 高度情報社会のコミュニケーション

ix) コミュニケーションとインターネット

x) ネットワークコミュニティの形成

xi) 国際コミュニケーション

- ・テキスト/参考書: 船津 衛『コミュニケーション・入門』有斐閣 1994 年

### ② 社会と情報

- ・情報の技術的側面, とくに人, 組織, 社会との関わりの中で情報の果たす役割およびそれにかかわるコンピュータの可能性, 問題点, 限界等を広い視野から学ぶ:

i) 情報とは何か

ii) 人間の活動と情報

iii) 社会システムと情報

iv) コンピュータと情報処理

v) ハードウェアの論理

vi) ソフトウェアの論理

- vii) コンピュータの能力と限界
- viii) 社会と情報システム
- ix) コミュニケーションとインターネット
- x) メディアとコンピュータ
- xi) 人間とコンピュータの比較
- xii) ヒュマンインターフェース

### ③ 情報処理基礎・同演習

- ・「情報処理A」に該当し、つぎの内容を含む：ブラインドタッチ，Eメール，インターネットアクセス，ワードプロセッサの修得。

### ④ データ解析基礎および同演習

- ・「情報処理B」に相当するが，データ整理と統計初歩の習熟を目的とし，Excelを用いて学習する。

## 2 データサイエンス群

### 2.1 データサイエンス・フィールドワーク群共通

#### ① 資料収集法

- ・既存の統計データの探し方，基本的な加工の方法，文献の検索方法，新聞記事の検索方法などについて学習する。

#### ② 社会調査の技法と実際

- ・社会調査の目的と基本的方法を学び，調査事例の学習を通じその実際的技法を理解する。

### 2.2 データサイエンス群

#### ① 量的調査方法論・量的調査演習 I

- ・量的調査の方法を学ぶとともに，「課題・仮説の検討→調査表の作成→調査の実施→データ解析→調査結果の発表」という一連の過程を学習する。
- ・データ解析 クロス集計，検定
- ・テキスト：大谷信介他編著『社会調査へのアプローチ～論理と方法』ミネルヴァ書房 1999年

#### ② データ解析・データ解析演習

- ・統計的推計と検定，数量化理論などをSPSSを用いて学ぶ。できるだけ①で得

たデータを用いる。

- ・テキスト：内田 治『すぐわかる SPSS によるアンケート調査・集計・解析』東京図書 1997年

土田昭司『社会調査のためのデータ分析入門』有斐閣 1994年

### ③ 量的調査設計・量的調査演習 II

- ・各個人が調査を設計・実施し，調査レポートをまとめる。

### ④ 調査論文A

- ・③の調査レポートを元に，補足調査などを行い調査論文に仕上げる。

## 3 フィールドワーク群

### ① 質的調査方法論・質的調査演習 I：

- ・質的調査の方法を学ぶとともに，「課題・仮説の検討→調査方法の検討→フィールドワークの実施→調査結果の発表」という一連の過程を学習する。

・テキスト：佐藤郁哉『フィールドワーク』新曜社 1992年  
箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房 1999年

### ② 質的調査設計・質的調査演習 II

- ・各個人が調査を設計・実施し，調査レポートをまとめる。

### ③ 調査論文B

- ・②の調査レポートを元に，補足調査などを行い調査論文に仕上げる。

## 4 データベース・マルチメディアおよび情報ネットワークシステム群共通

データベース・マルチメディア群および情報ネットワークシステム群間の関連性に留意し，共通基礎科目を配し両者を極端に分離しないようにした。

### 4.1 共通科目

#### ① プログラミング・同演習：

- ・現在のプログラミングA/Bの半期分に相当。複数言語開講するが，固定しない。

- ・ 1つのプログラミング言語の基本機能の理解，修得を目的とし，応用等は後続の科目に譲る。
- ② データ構造とアルゴリズム論・同演習
  - ・ コンピュータサイエンスで用いられる基本的アルゴリズムを学び，その計算量等を理解し，その演習をプログラミングとして行う。
- ③ 情報メディアシステム論
  - ・ ソフトおよびハードの両面からマルチメディア情報システムに関する基本技術と実システムを学ぶ。
- ④ 情報通信ネットワーク論
  - ・ ネットワークアーキテクチャ，とくにTCP/IPプロトコルを用いたネットワーク構築の基本原理を学ぶ。

## 5 データベース・マルチメディア群

### 5.1 科目履修順序

データベース系列とマルチメディア系列は独立に履修可能とする。

DB科目履修者はDB基礎・同演習，DB設計論基礎・同演習を必修とする。

### 5.2 データベース科目

- ⑤ DB基礎
  - ・ 簡易関係DBソフトACCESSを利用して，DBの基礎概念および基本システム体系について学ぶ。
- ⑥ DB基礎演習
  - ・ 簡易関係DBソフトACCESSを利用して，関係DBの定義および操作を学ぶ。
- ⑦ DB設計論基礎
  - ・ DBの概念設計(ERモデル，オブジェクトモデル)，論理設計，物理設計に関する基礎理論を学ぶ。
- ⑧ DB設計論基礎演習
  - ・ 簡易関係DBソフトACCESSを利用して，DB設計・DB構築・DB操作を学ぶ。
- ⑨ 情報ベースシステム論
  - ・ DBシステムの核であるDB管理システ

ムの主要機能・実現技術および主要DBシステム(データウェアハウス等)の具体例を学ぶ。

### ⑩ DBシステム特論

- ・ 先進的DBシステム(オブジェクト指向DB，演繹DB，データマイニング，データウェアハウス等)を学ぶ。

### 5.3 マルチメディア科目

#### ⑪ 基礎CG論

- ・ コンピュータグラフィックス論の基礎を学び，演習をとおして2次元から3次元までの図形描画技法を修得する。

#### ⑫ 応用CG論

- ・ CG制作を体験させることを狙いとし，ソフトウェアツールを用いた実習を行う。

#### ⑬ 知能情報論基礎

- ・ 種々の探索手法，機械学習法等の知識情報処理に関する基礎と応用例を学ぶ。

#### ⑭ マルチメディア演習

- ・ コンピュータミュージック，ゲームプログラミング，アニメーションシステム等のマルチメディア関連システムの設計開発を演習する。

#### ⑮ 知能情報処理特論

- ・ 知能情報処理に関する高度な知識と応用について学ぶ。

## 6 情報ネットワークシステム群

### 6.1 科目説明

#### ① コンピューティング環境管理論

- ・ 利用するコンピューティングおよび情報ネットワーク環境を実際的に理解し，必要に応じ，自分で管理するために必要な基礎的知識を学ぶ。

#### ② コンピュータアーキテクチャ

- ・ オペレーティングシステムの理解に必須の事項，割り込み，仮想記憶等について学ぶ。

#### ③ 比較プログラム言語論



- ・一つのプログラミング言語を修得した後、命令型言語に共通する概念を学び、さらに新たな言語を学ぶ際の橋渡しとする。
- ④ ネットワークプログラミングの基礎
  - ・TCP/IPによるプログラミングの基礎的技法を学ぶとともに、ネットワークの理解を一層深める。
  - ・参考書：金内，今安共著『UNIX ネットワークプログラミング』オーム社 1993年
- ⑤ オペレーティングシステム論
  - ・情報処理システムの核であるOSの基本構造，プロセス／スレッド管理，仮想記憶方式，ファイルシステムを学ぶ。
- ⑥ ネットワークプログラミング論
  - ・クライアント／サーバシステム等を学び，より高度で実際的なネットワークアプリケーション開発技法を学び，その方法を理解する。
  - ・参考書：コア・ダンプ著『インターネットプログラミング』プレントイスホール
- ⑦ システムプログラム論
  - ・より高度で効率的なアプリケーションプログラム開発に必要な並行処理の基礎を学ぶ。
- ⑧ システムセキュリティ
  - ・情報ネットワークシステムのセキュリティの重要性を理解し，その技術——ファイアウォール，暗号化，認証，デジタル署名等と運用方法を学ぶ。
- ⑨ ソフトウェア設計・開発論
  - ・ソフトウェア開発に必要な設計手法を具体的，実際的に学び，より高度な開発設計手法の理解と実践への準備とする。情報システム群の「情報システム開発論」等に比し，ソフトウェア／情報処理システム開発に特化する。
  - ・テキスト／参考書：高原康彦編著『システム設計の理論と実際』近代科学社

1991年

P.J.プローガ『プログラミングの壺——ソフトウェア設計論』共立出版 1995年

## 7 社会情報学群

### 7.1 社会情報学・現代社会論群共通

人間が社会的存在であることを時間的・空間的広がりの中で理解する科目を用意する。

#### ① 現代社会の基礎

- ・1945年以降の日本社会の展開について講義する：敗戦処理の問題，高度成長，大学紛争，サブ・カルチャーの展開，東西冷戦の終結

#### ② 近代社会の基礎

- ・現代社会の背景をなす近代社会の基礎的知識と我々の生活との関連について講義する。日常生活の多くの側面において，家族や地域共同体の機能が社会化されていくことを中心におく。

#### ③ 人間論の基礎

- ・人間が社会的存在であることを日常生活のさまざまな場面で取り上げ説明する。その観点からどのような問題が見出せ，また捉えられるかを展開する。

#### ④ 社会生活論

- ・具体的な問題を取り上げ，その検討をとおして，社会的に認識・分析・解決する力を身につける

### 7.2 社会情報学群

社会情報のコミュニケーションを考察する際の基本となる人間の認知および心理について学び，コミュニケーションおよびメディアによるコミュニケーションの機能，問題点を探る。

#### ① コミュニケーション論Ⅰ・Ⅱ

- ・人と人とのかかわりがコミュニケーションである。人は自分自身も含めて誰かとコミュニケーションしている。幼児がことばを学んでいくのも言語以前のコミュニケーションによっている。人間を社会に

結びつけているコミュニケーションのあり方, その特徴を学ぶ.

- ・テキスト/参考書: 船津衛『コミュニケーション・入門』有斐閣アルマ, 1996

## ② 認知行動論

- ・人間が周囲の出来事や物事についてどのように知り, 考え, 理解しているのかという, 心の中の情報処理過程を明らかにすることから, 人間の行動を理解するという観点を学ぶ.

## ③ 情報処理の社会心理

- ・人間における情報処理活動には, 感覚的次元のものから, 知覚, 記憶といったより高次の処理にいたるまで, さまざまなレベルのものが含まれる. 人間の情報処理活動を社会との関連で捉える視点の重要性を学ぶ.
- ・テキスト/参考書: 中島義明『情報処理の心理学』有斐閣, 1995

## ④ 認知科学

- ・人間の情報処理活動は, デジタル処理しているかないかは別にして, 文字・映像・音声情報を有機的に利用するマルチメディアの形態をとっている. 人間の情報処理過程を総合的に研究する認知科学の視点について学ぶ.
- ・テキスト/参考書: 中島義明『映像の心理学』サイエンス社, 1996

## ⑤ メディア・コミュニケーション論 I・II

- ・TV, 新聞, 雑誌や書籍, CD, ビデオやインターネットなどのメディアを介したコミュニケーションは 20 世紀になって普及した. このようなメディア・コミュニケーションの特徴と問題点, 将来の可能性は何かについて, 認識し考察する見方を学ぶ.

## ⑥ 社会情報学 I・II

- ・情報化の進展により変貌する社会を従来の情報社会論より包括的に捉える「社会情報」の立場から展開する.

## 8 現代社会論群

(社会システム論系)

「社会システム」論は個々の社会現象を全体的見地から解明する. すなわち, いかなる行動, 活動, 社会過程もより包括的システムの要素, 部分としてのみ理解可能である.

### ① 社会システム論 I・II

- ・人間のふるまいはさまざまなレベルで意味をもつことがある. 自分にとっての意味, 相手との関係にとっての意味, 社会にとっての意味など, 複数の種類のシステムに織り込まれている. 「行為」と「役割」という社会学の基本概念をもとにして日常的な現象や出来事を社会学的に捉える見方を学ぶ.

(現代社会論系)

現代社会を全体として捉えたときに, 個々の社会問題が現代社会そのものの問題のいかなる具体的な現われなのかという観点から捉えようと試みる. つぎの科目を配置する:

### ② 情報社会論

- ・社会の中で見受けられるさまざまな情報現象に着目して, それらの情報現象が現代社会のどのような特徴を反映しているのか, そこにどのような問題があるのかを捉える視点を学ぶ.

### ③ 現代社会論

- ・現代社会は情報化社会, 消費化社会と呼ばれている. そこには魅力と同時に, 環境・資源問題, 南北問題などの, 地球規模の問題もある. 前者と後者の特徴を関連づけて捉え, 現代社会が一体どのようなように形成されたのか, また将来的にどのような現実的な可能性を持っているのかを検討する.
- ・テキスト/参考書: 見田宗介『現代社会の理論』岩波新書, 1996

### ④ 地域社会論

- ・わたしたち人間は地域に根ざして生活している. 地域の具体的な問題を考えるこ

とを通して社会の問題を見て取る視点を学ぶ。

#### ⑤ 社会組織論

- ・日常生活の中で、私たちはさまざまな集団に属している。学校、会社などの公的な組織ばかりでなく、サークル、なかま集団など非公式な組織にも所属している。さまざまな組織のあり方、その問題点を捉える見方を学ぶ。

#### ⑥ アイデンティティ論

- ・社会の中の「わたし」、日常生活の中の「わたし」、この「わたし」がどのように作られどのように変化していくのかを検討することを通して、現代社会の問題を「わたし」が担っているという観点を学ぶ。

#### ⑦ 情報空間論

- ・あたかもそれ自体が生命があるかのように、情報が情報として流通するようになったのは近代以降の社会においてである。この歴史的な変化がどのようにして生じたのかを、情報という概念に着目して検討する見方を学ぶ。

### 9 情報システム群

システムの工学的側面を理解するとともに、種々の具体的事例の分析・討論をとおしてシステムを人間の立場／利用する立場から考察する見方を学ぶ。

#### ① 情報システムの基礎

- ・組織あるいは社会における情報の利用の観点から、情報システムあるいは情報処理システムを捉える視点を学ぶ。
- ・テキスト：飯島淳一『情報システムの基礎』日科技連 1999年

#### ② システム事例調査

- ・情報システムの理解を深めるため、複数の具体的システムを分析・討論し、その問題点を考察する。
- ・テキスト／参考書：D.A. ノーマン『誰のためのデザイン？ — 認知科学者のデザ

イン原論』1990年、『テクノロジー・ウォッチング — ハイテク社会をフィールドワークする』1993年、『人を賢くする道具 — ソフト・テクノロジー心理学』1996年、新曜社

#### ③ 人と機械のインタフェース (MMI/HCI)

- ・「人間と機械のかかわりに関する分析と記述、およびインタフェースの設計に関する」枠組みを学ぶ。
- ・テキスト：J. ラスムッセン『インタフェースの認知工学 — 人と機械の知的かかわりの科学』1990年 啓学出版

#### ④ システム論 I・II

- ・現行のシステム工学に対応

#### ⑤ シミュレーション論 I・II

- ・現行のシミュレーション論に対応

## 3 履修モデル

## 1. メディアとコミュニケーション指向モデルの履修例

社会情報学群，現代社会論群を軸に，その他の群の基礎的科目を幅広く学ぶ。

学年	種 別	履 修 科 目 名	単 位 数	
1 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4単位
		選 択	心理学A，心理学B，憲法，環境と法，言語とコンピュータを含め8科目（各類から履修することが望ましい）	16単位
	専 門	指定必修	基礎ゼミナールⅠ，基礎ゼミナールⅡ，情報処理基礎，情報処理基礎演習，データ解析基礎，データ解析基礎演習，社会とコミュニケーション，社会と情報	16単位
		選択必修	コミュニケーション論Ⅰ，人間論の基礎，社会生活論，資料収集法，社会調査の技法と実際	10単位
2 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4単位
		選 択	西洋史，女性学，数学A，数学B，アジア事情A，アジア事情Bを含め8科目（各類から履修することが望ましい）	16単位
	専 門	選択必修	情報処理の社会心理，認知行動論，電子メディア論，社会システム論Ⅰ，社会情報学Ⅰ，アイデンティティ論，メディアコミュニケーション論Ⅰ，コンピューティング環境管理論，社会組織論，情報社会論，データベース基礎，データベース基礎演習，コンピュータアーキテクチャ	26単位
3 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナールⅠ，専門ゼミナールⅡ，専門ゼミナールⅢ	6単位
		選択必修	コミュニケーション論Ⅱ，認知科学，社会情報学Ⅱ，情報と職業，メディアコミュニケーション論Ⅱ，地域メディア論，社会システム論Ⅱ，データベース設計論基礎，データベース設計論基礎演習，オペレーティングシステム論	20単位
4 学 年	専 門	選 択	社会情報学特論A	2単位
		指定必修	専門ゼミナールⅣ	2単位
		選択必修	情報空間論，地域社会論	4単位
		選 択	卒業論文，社会情報学特論B	8単位
総 単 位 数		全学共通科目 40単位 専門科目 94単位 合計 134単位		

## 2. 社会のデータ解析指向モデルの履修例

データサイエンス群とデータベース・マルチメディア群を系統的に学ぶ。

学年	種 別		履 修 科 目 名	単位数
1 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4 単位
		選 択	日本文学, 人類学A, 人類学B, 憲法, 言語とコンピュータを含め8科目 (各類から履修することが望ましい)	16単位
	専 門	指定必修	基礎ゼミナールI, 基礎ゼミナールII, 情報処理基礎, 情報処理基礎演習, データ解析基礎, データ解析基礎演習, 社会とコミュニケーション, 社会と情報	16単位
		選択必修	資料収集法, 社会調査の技法と実際, 現代社会の基礎, 近代社会の基礎, 情報システムの基礎	10単位
2 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4 単位
		選 択	蝦夷論, くらしと法, 平和学, 統計学A, 統計学B, 総合講義A, 総合講義B, 地球環境変遷史	16単位
	専 門	選択必修	量的調査方法論, 量的調査基礎演習, データ解析, データ解析演習, データベース基礎, データベース基礎演習, データベース設計論基礎, データベース設計論基礎演習, 社会システム論I, メディアコミュニケーション論I, 社会情報学I, システム事例調査, 人と機械のインターフェース	26単位
3 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナールI, 専門ゼミナールII, 専門ゼミナールIII	6 単位
		選択必修	量的調査設計, 量的調査演習, 情報ベースシステム論, 社会情報学II, 社会システム論II, 情報と職業, 地域社会論, メディアコミュニケーション論II, システム基礎論, シミュレーション基礎論, 基礎コンピュータグラフィックス論	22単位
4 学 年	専 門	選 択	社会情報学特論B	2 単位
		指定必修	専門ゼミナールIV	2 単位
		選択必修	データベースシステム特論, 情報空間論	4 単位
		選 択	卒業論文, 社会情報学特論A	8 単位
総 単 位 数			全学共通科目 40単位 専門科目 96単位 合計 136単位	

## 3. フィールドワーカー指向モデルの履修例

フィールドワーク群を中心に学び、社会調査士資格の取得を目指す。

学年	種 別	履 修 科 目 名	単位数	
1 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4単位
		選 択	北海道の歴史A, 北海道の歴史B, 憲法, 教育と人権, 生物学A, 生物学Bを含め8科目(各類から履修することが望ましい)	16単位
	専 門	指定必修	基礎ゼミナールI, 基礎ゼミナールII, 情報処理基礎, 情報処理基礎演習, データ解析基礎, データ解析基礎演習, 社会とコミュニケーション, 社会と情報	16単位
		選択必修	資料収集法, 社会調査の技法と実際, 人間論の基礎, 社会生活論, 情報システムの基礎	10単位
2 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4単位
		選 択	人文地理A, 人文地理B, 現代社会と生活, 社会思想史, 数学C, 数学D, 総合講義C, 総合講義D	16単位
	専 門	選択必修	質的調査方法論, 質的調査基礎演習, 量的調査方法論, 量的調査基礎演習, データ解析, データ解析演習, データベース基礎, データベース基礎演習, 認知行動論, 社会情報学I, メディアコミュニケーション論I, システム事例調査, 人と機械のインターフェース	26単位
3 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナールI, 専門ゼミナールII, 専門ゼミナールIII	6単位
		選択必修	質的調査設計, 質的調査演習, 認知科学, 社会情報学II, メディアコミュニケーション論II, 情報と職業, 地域社会論, 地域メディア論, システム基礎論, シミュレーション基礎論,	20単位
4 学 年	専 門	選 択	社会情報学特論B	2単位
		指定必修	専門ゼミナールIV	2単位
		選択必修	情報空間論, システム応用論	4単位
		選 択	卒業論文	6単位
総 単 位 数		全学共通科目 40単位 専門科目 92単位 合計 132単位		

## 4. 人間の情報処理分析指向モデルの履修例

社会生活を営む人間の「心（脳）のはたらき」を社会情報と情報処理という観点で展開する。

学年	種 別	履 修 科 目 名	単位数	
1 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4単位
		選 択	心理学A, 心理学B, 西洋文学, 憲法, 現代の福祉, 統計学A, 統計学Bを含め8科目（各類から履修することが望ましい）	16単位
	専 門	指定必修	基礎ゼミナールⅠ, 基礎ゼミナールⅡ, 情報処理基礎, 情報処理基礎演習, データ解析基礎, データ解析基礎演習, 社会とコミュニケーション, 社会と情報	16単位
		選択必修	資料収集法, 社会調査の技法と実際, 人間論の基礎, 現代社会の基礎, コミュニケーション論Ⅰ, 情報システムの基礎	12単位
2 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4単位
		選 択	東洋の芸術・文化A, 現代の経済, 国際問題, 数学A, 数学B, 総合講義A, 総合講義B, 生物進化と地球環境	16単位
	専 門	選択必修	量的調査方法論, 量的調査基礎演習, データ解析, データ解析演習, 情報処理の社会心理, 認知行動論, メディアコミュニケーション論Ⅰ, 社会情報学Ⅰ, 情報社会論, 人と機械のインターフェース, システム事例調査, コンピューティング環境管理論, コンピュータアーキテクチャ	26単位
3 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナールⅠ, 専門ゼミナールⅡ, 専門ゼミナールⅢ	6単位
		選択必修	量的調査設計, 量的調査演習, コミュニケーション論Ⅱ, メディアコミュニケーション論Ⅱ, 電子メディア論, 現代メディア論, 社会情報学Ⅱ, 認知科学, マルチメディア処理論, オペレーティングシステム論,	20単位
4 学 年	専 門	選 択	社会情報学特論A	2単位
		指定必修	専門ゼミナールⅣ	2単位
		選択必修	知能情報基礎論, 知能情報特論, 情報通信ネットワーク論	6単位
		選 択	卒業論文, 社会情報学特論B	8単位
総 単 位 数		全学共通科目 40単位 専門科目 98単位 合計 138単位		

## 5. システム管理指向モデルの履修例

データベース、マルチメディア、ネットワーク関連科目を幅広く学び、エンドユーザコンピューティング環境の運用に習熟する。

学年	種 別		履 修 科 目 名	単位数
1 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4 単位
		選 択	日本近代史B, 暮らしと法, 統計学A, 数学Cを含め8科目 (各類から履修することが望ましい)	16単位
	専 門	指定必修	基礎ゼミナールI, 基礎ゼミナールII, 情報処理基礎, 情報 処理基礎演習, データ解析基礎, データ解析基礎演習, 社会 とコミュニケーション, 社会と情報	16単位
		選択必修	現代社会の基礎, 人間論の基礎, 近代社会の基礎, コミュニ ケーション論I	8 単位
2 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4 単位
		選 択	西洋史, 現代の経済, 現代の福祉, 現代社会と流通を含め8 科目 (各類から履修することが望ましい)	16単位
	専 門	選択必修	データベース基礎, データベース基礎演習, データベース設 計論基礎, データベース設計論基礎演習, コンピューティング 環境管理論, 情報処理の社会心理, コンピュータアーキテ クチャ, プログラミング, プログラミング演習, データ構造 とアルゴリズム論, データ構造とアルゴリズム論演習, 社会 組織論, 社会情報学I	26単位
3 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナールI, 専門ゼミナールII, 専門ゼミナールIII	6 単位
		選択必修	マルチメディア処理論, マルチメディア処理演習, オペレー ティングシステム論, 情報通信ネットワーク論, 情報ネット ワーク演習, コミュニケーション論II, メディアコミュニケー ション論II, 情報と職業, 認知科学, 社会情報学II	20単位
4 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナールIV	2 単位
		選択必修	情報メディアシステム論, 情報ネットワーク特論, 知能情報 基礎論, 知能情報特論	8 単位
		選 択	卒業論文	6 単位
総 単 位 数			全学共通科目 40単位 専門科目 92単位 合計 132単位	



## 6. システムエンジニア指向モデルの履修例

情報ネットワークシステム群を中心に学び、システム開発等に習熟する。

学年	種 別		履 修 科 目 名	単位数
1 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4単位
		選 択	日本近代史B, くらしと法, 統計学A, 数学Cを含め8科目 (各類から履修することが望ましい)	16単位
	専 門	指定必修	基礎ゼミナールⅠ, 基礎ゼミナールⅡ, 情報処理基礎, 情報 処理基礎演習, データ解析基礎, データ解析基礎演習, 社会 とコミュニケーション, 社会と情報	16単位
		選択必修	現代社会の基礎, 人間論の基礎, 近代社会の基礎, 情報シス テムの基礎	8単位
2 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4単位
		選 択	西洋史, 宗教学A, 現代の経済, 現代社会と流通を含め8科 目(各類から履修することが望ましい)	16単位
	専 門	選択必修	データベース基礎, データベース基礎演習, データベース設 計論基礎, データベース設計論基礎演習, コンピューティン グ環境管理論, システム事例調査, コンピュータアーキテク チャ, プログラミング, プログラミング演習, データ構造と アルゴリズム論, データ構造とアルゴリズム論演習, 社会組 織論, 人と機械のインターフェース, 社会システム論Ⅰ	28単位
3 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナールⅠ, 専門ゼミナールⅡ, 専門ゼミナールⅢ	6単位
		選択必修	比較プログラム言語論, オペレーティングシステム論, 情報 通信ネットワーク論, 情報ネットワーク演習, システム基礎 論, シミュレーション基礎論, 認知科学, メディアコミュニ ケーション論Ⅱ, 社会システム論Ⅱ	18単位
4 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナールⅣ	2単位
		選択必修	ネットワークプログラミング論, 情報ネットワーク特論, シ ステムプログラム論, ソフトウェア設計・開発論, 情報メデ ィアシステム論, 知能情報基礎論, 知能情報特論	14単位
総 単 位 数			全学共通科目 40単位 専門科目 92単位 合計 132単位	

## 7. 教員免許「中学社会」「高校公民」及び「情報」取得指向モデルの履修例

社会情報学・現代社会論群，データベース・マルチメディア，情報ネットワークシステム群を幅広く学び，3種類の教員免許の取得を目指す。

学年	種 別		履 修 科 目 名	単位数
1 学 年	全学共通	必 修	外国語科目（英語 I Bは教員免許取得の必修科目である。）	4 単位
		選 択	憲法，スポーツA，哲学A，倫理学A，宗教学A，心理学Aを含め7科目（各類から履修することが望ましいが，教員免許取得には憲法は指定必修科目であり，スポーツA並びに哲学A以降は選択必修科目となっている。）	14単位
	専 門	指定必修	基礎ゼミナール I，基礎ゼミナール II，情報処理基礎，情報処理基礎演習，データ解析基礎，データ解析基礎演習，社会とコミュニケーション，社会と情報	16単位
		選択必修	現代社会の基礎，人間論の基礎，近代社会の基礎，資料収集法，社会調査の技法と実際，社会生活論，情報システムの基礎	14単位
2 学 年	全学共通	必 修	外国語科目	4 単位
		選 択	スポーツB，西洋史，現代の教育，教育と人権を含め8科目（各類から履修することが望ましい）	16単位
	専 門	選択必修	コミュニケーション論 I データ解析，データ解析演習，コンピュータアーキテクチャー，量的（質的）調査方法論，量的（質的）調査基礎演習，社会システム論 I，電子メディア論，データベース基礎，データベース基礎演習，プログラミング，プログラミング演習，データ構造とアルゴリズム論，データ構造とアルゴリズム論演習	28単位
3 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナール I，専門ゼミナール II，専門ゼミナール III	6 単位
		選択必修	社会組織論，オペレーティングシステム論 量的（質的）調査設計，量的（質的）調査演習，社会システム論 II，地域社会論，コミュニケーション論 II，アイデンティティ論，認知行動論，データベース設計論基礎，データベース設計論基礎演習 情報通信ネットワーク論，情報ネットワーク演習 マルチメディア処理論，マルチメディア処理演習 シミュレーション基礎論，情報と職業	34単位
4 学 年	専 門	指定必修	専門ゼミナール IV	2 単位
		選択必修	地域メディア論，情報空間論，情報通信ネットワーク論，情報ベースシステム論	10単位
総 単 位 数			全学共通科目 38単位 専門科目 110単位 合計 148単位	

※教職免許「情報」を取得するためには，上記科目のほか「教職に関する科目」の単位の修得が必要となる。詳しくは資格課程の履修要項を参照のこと。

上記カリキュラムを急ぎ検討し答申するに至った経緯、その考え方及び検討課題について述べる。

#### 4 大学をめぐる状況と改訂事由

委員会設置当初、2001年3月くらいを目途に答申すればよいという雰囲気であったが、委員会はカリキュラム改訂を急がなければならないと判断した。その理由は以下のとおりである。

改めて指摘するまでもなく、少子化傾向、それに伴う18歳人口の減少により大学が経営危機(?)に追い込まれることが予想されている。例えば、中村忠一「危ない大学」(2000年版)によれば、2009年には282大学が危ないという。また、昨今の経済状況、とくに北海道の経済状況は日本全体の平均的状況よりさらに悪く、道内私大への進学率に直接反映すると予想される。

一方、仮に何とか入学者を確保できたとしても、全入現象に伴い、いわゆる偏差値は低下すると思われる。文部省試算によると、1996、1999、2009年の入学率はそれぞれ73.0%、80.1%、91.9%であるが、道内進学率は全国平均より低いから入学率は一層高くなり、さらに偏差値は低下すると予想される。また、大学の大衆化に伴い、学生の学ぶ意識、目的意識にも変化が起こっている。大学で学びながら資格や技術取得を目指す実学指向が強い。実際、全国119大学を学部学生を対象にした調査によれば、4人に1人は学内外の正課外講座や専門学校等で勉強しているという。就職等への不安を反映した「ダブルスクール」指向は、ある意味では学生が直面している状況に大学が充分応えていないという一面の反映でもある。したがって、学ぼうとする学生諸君に応えるべく、大学が自ら変貌してゆく必要があり、その具体的反映がカリキュラムである。

以上の状況を踏まえたとき、「札幌学院大学

社会情報学部」を学生、社会にアピールし、学生にとって魅力あるものにするにはどのような選択があるであろうか。本委員会は奇を衒うよりは、学生諸君の意識及び現在のカリキュラムの抱える問題点を充分調査・分析し、これに応えることが大道であると判断する。そのため、全学生対象にアンケート調査を行い、問題点を洗い出すこととした。「社会情報学部」としての特色をできる限りシンプルな形でカリキュラムに反映させ、その中で学生諸君の提起したさまざまな問題点に応えるアプローチを採用する。

さらに、カリキュラムが学内外の変化に対応できるよう配慮しなければならない。具体的には、学校教育法等の一部改正に伴う三年次卒業について検討し、学内では、 Semester制への移行を踏まえ、ほぼすべての科目を2単位科目として構成するなどの措置を講じる必要がある。

#### 5 社会情報学部の存在理由とキャッチフレーズ

人間の活動は物的生産活動と知的生産活動の二つに大別することができる。社会の複雑化、科学・技術の進展に伴い、知的生産活動の物的生産活動に対する相対的比重が増すなかで、「情報」が人—組織—社会の成り立ち、発展に欠かせないものとして認識されてから久しい。しかし、「情報」に対する認識は、情報技術と通信技術の発展に負うところが大きいこともあって、情報処理技術の観点に偏りがちである。これに対し、「社会情報」は、その顕在化を情報技術の発展に負うとしても、人間の活動に本質的なものとして情報を捉え、その意義、役割、影響を明らかにしようとするものである。

社会情報は社会生活のさまざまな局面で作られ、コミュニケーションされる。したがって、情報の収集、生産、蓄積、アクセス、伝達を社会的文脈でとらえる必要がある。そ

の意味で、社会情報(学)はシンボルとコミュニケーションを研究対象とする社会学の対象を含むが、社会情報は情報の発生メカニズムにより比重をかけ、社会学は社会的文脈により比重をかけているといえる。

社会情報はコミュニケーションなくして意義を持ち得ないから、現在最も有効な方法である情報処理技術の役割は極めて大きいといわなければならない。とくに、インターネットの普及にみられるように、今後、個人、組織、社会に与える影響は計り知れないものと考えられる。実際、F. Flores[未来のリーダー、P. Denning 他編：未来社会におけるコンピュータ、トッパン、1998]に従って人とコンピュータの関わりを

第一の時代：情報処理機械

第二の時代：コミュニケーションの道具

第三の時代：自己のアイデンティティを見極め、変革する手段

の3つに時代区分するとすれば、一部の若い世代は既に第三の時代に突入し、電子のコミュニケーションによるネットワーク社会の中で自己を認識しているといえるかもしれない。

「社会情報」を以上のように捉えるなら、「コミュニケーション」→「ネットワーク」を「社会情報学部」を支える柱とできるのではないか。そこで、たとえば、つぎのようなキャッチフレーズが考えられる？

- ・「社会情報」からネットワーク社会を読み解く
- ・ネットワーク社会を生き抜く(力の創造)
- ・ネットワークを介した自己創造
- ・私の中のネットワーク、ネットワークの中の私
- ・私の中で交差する内と外のネットワーク

## 6 教育目標と人材育成

社会情報学が上記のとおりであるとするなら、つぎの2つが社会情報学部の教育目標と

ならなければならない：

1) 社会、情報に対するトータルな視点を涵養する。

2) 情報の収集、分析、処理に対する方法、スキルを涵養する

社会情報学的見地から1)をさらに具体的に敷衍するとつぎのようになるであろう：

① 人、組織、社会に対する歴史的、全般的理解

② その中で果す情報の特質と社会的

③ 人、組織、社会における情報のコミュニケーション

同様に、2)もつぎのように展開することができよう：

④ 調査等における情報の扱い方、収集方法

⑤ 情報、データ分析方法とその社会的評価法

⑥ 情報、データの蓄積、伝達／コミュニケーション方法

一方、情報処理技術の飛躍的進歩にともなって、組織体のさまざまな活動にコンピュータが導入され、その運用が組織全体の見地から捉えられつつある。しかし、コンピュータ、情報処理技術のみを中心に組織を運用するのが目的ではなく、それぞれの組織体にマッチした情報システムのあり方が問題なのである。実際、社会が現場で必要としているのは「マネージャ、スタッフ、顧客、市民など情報の利用を望んでいる人々にとって、手に入れやすく役に立つような形で、組織体(または社会)に適切な情報を集め、保管し、処理し、伝達するシステムである。情報システムは人間活動の(社会的な)システムであって、コンピュータシステムを利していないでもいい」のである。具体的には、「情報システムの中で働くビジネスマン」、「情報システムとは何か、自分たちにどう係わるかを理解できる社会人」などの人材を育成す

ることも要請されている。

そのためにはつぎのような知識と能力をもった教育が必要になる〔細野，浦：情報システム人材の教育体系の確立について：情報処理 Vol.34 No.6〕。

- 1) 情報およびコミュニケーションの観点からシステムを考察する知識と能力
- 2) 対象領域について考察し，問題点を洞察する知識と能力
- 3) 情報獲得・伝達・処理に関するコミュニケーション，解析，処理の情報技術を活用する能力
- 4) コンピュータや通信技術に関する将来動向を認識できる能力

これらのうち，1)，2)は全体的視点を学ぶ科目群で養成され，3)，4)はスキル科目群をとおして学ぶことができる。

このような人材を育成することが社会情報学部教育の目標となる。

## 7 検討を要する個別課題

以上の理念および教育目的に沿ったカリキュラムを編成することは当然であるが，他方では，学部創設以来の教育経験，学生等の要望および学内外をめぐる事態の変化に伴ってさまざまな課題も山積している。委員会はこれらの問題を把握するため，ヒアリング，教授会審議をとおして教員の意見を幅広く聴取するとともに，学生に対するアンケート調査（別紙5）も実施し，その意識，要望，問題点等の把握に努めた。その結果明らかになった主たる検討課題を摘記する。

- 1) 卒業研究を必修科目としてゆくことが可能か
- 2) 仮に卒業研究を選択としたとき，どのようなカリキュラムが適当か
- 3) 必修科目が多すぎる
- 4) 選択の幅が小さすぎる
- 5) 2年次以降にコンピュータ実習科目が少ない

- 6) 専門科目としての内容が不十分である
- 7) 学校教育法の一部改正に伴ない，3年次卒業の織り込んで行く
- 8) 学内全体のセメスター制以降に対応する
- 9) 資格の拡大，とくに教員免許「情報」について検討する
- 10) その他

## 8 カリキュラム編成方針

6で述べた観点からカリキュラム編成を考えると，自づからつぎの構成をとるのが妥当である。すなわち，全体的視点の涵養とスキルの修得を横糸，縦糸とし，互いに他を補完するように構成する。また，履修に関する多様な希望，要望があり，また社会的ニーズおよび学生の将来の方向は実に様々な可能性がある。

これらを考慮し，全体的視点の具体的内容①，②，③をつぎの科目群から構成する：

- ・現代社会論群：社会に関する認識を深める
- ・社会情報学群：情報を社会的視野から理解する
- ・情報システム群：組織，社会をシステムとして捉える

一方，情報技術修得は全体的視野に立った上で情報，データの具体的，実際の扱い方および情報処理システムの全般的理解に通じた教育をねらいとする。したがって，ここではスキルを重視した教育を含める必要があるが，進歩の激しい情報処理技術の分野にあってはあまり単なるノウハウに比重をかけすぎるとすぐ使い物にならなくなるし，理屈に偏ると役に立たないという面がある。

- ・フィールドワーク群，データサイエンス群：調査方法，データの収集・分析
- ・データベース・マルチメディア群：データの蓄積，
- ・情報ネットワークシステム群：情報のコミュニケーション

これらの科目群は以下の経緯を構成する：

	データ サイエンス群	フィールド ワーク群	データベース・ マルチメディア群	情報ネットワーク システム開発群
現代社会論群				
社会情報学群				
情報システム群				

科目群を上のように編成するとつぎの教育、履修、選択等が可能になる：

社会・情報システム系列，データサイエンス・IT 系列の 2 系列を履修する

データサイエンス・IT 系列に関し，系統的に履修することができる

社会・情報システム系列を主体とした場合でも，データサイエンス・IT 系列の選択の自由度が大きい。

希望あるいは将来の方向に応じて，広く学ぶことも，ある領域を深く学ぶことも可能である。

### 8.1 各個別課題に対する結論

大枠は以上のとおりであるが，7で掲げた各問題に対する方針を示す。

1) 卒業研究を必修科目からはずし，選択とする。その理由を掲げる：

① 現在卒業研究は実質半期，あるいはそれ以下の期間しか機能せず，したがって，その内容もその名にふさわしいものが極めて少ない。

② 仮に卒業研究を必修からはずす場合，卒業研究が有するトレーニングとしての機能および学生の達成感を他の科目等で代替する必要がある。

2) 専門ゼミナールを重視する。

卒業研究を必修からはずしたことに伴ない，大学の専門教育機関としての低下につながるよう配慮する必要がある。この点を踏まえ，とくに専門ゼミナールを従来より充実させる。トレーニングとしての役割および達成感を重視する。具体的には専門ゼミナール I・II・III・IV を以下のとお

り設定する：

① 専門ゼミナール I・II・III の目的は従来，卒業研究が有していたと思われるトレーニング等に重点をおく。

② 専門ゼミ IV のねらいは専門ゼミ I・II・III で最終的に達成した課題等の目的，意義，問題点等を改めて位置づけし，人にわかるようにプレゼンテーションすることである。

③ 仮に 3 年次にプレゼンテーションを義務づけるなら，3 年次中に発表できるような課題を選択し勝ちであり，ひいてはトレーニングの重視という専門ゼミ本来のねらいが損なわれる恐れがある。

④ 専門ゼミ IV はプレゼンテーションのための整理等が主体であり，就職活動等を考慮しても充分 4 年前期に実施可能である。自己 PR，あるいは自分が取組んだ課題をアピールするトレーニングの場とする。

3) 必修科目を大幅に減らす。

学生から見たカリキュラムの柱をゼミナール系列（6 科目）と情報リテラシー群（6 科目）のみにおき，これだけを必修とする。

4) 選択科目数を大幅に増やす。

必修 12 科目を除き，他はすべて学生の目的意識に応じ自由に選択できる科目とする。自由になって選択に学生が困らないよう学習目標がはっきりわかるモデル履修例を明示する。

5) 演習・コンピュータ実習を重視する。

2 年次以降の科目に演習，コンピュータ実習を増やし，卒業まで講義，演習等でコンピュータに接する機会を大幅に増やす。

6) 専門科目の内容を充実

カリキュラム編成大方針で述べたように，スキル・IT 科目群では，相当程度深く専門科目を学ぶとともに，スキルを身につけるよう科目を構成する。

7) 三年次卒業について

今回の学校教育法の一部改正に伴う三年次卒業はあくまでも例外的措置であるが、カリキュラム上三年次までに容易に必要な単位数を取得できるよう編成する。しかし、本カリキュラムでは例外的措置として扱うのが適当と判断する。理由は以下のとおりである：

- ① 学校教育法第 55 条 3 項「大学は、文部大臣の定めるところにより、当該大学の学生(第 55 条第 2 項に規定する課程に在学するものを除く。)で当該大学に 3 年(同条第 1 項ただし書の規定により修業年限を 4 年を超えるものとする学生にあっては、3 年以上で文部大臣の定める期間)以上在学したもの(これに準ずるものとして文部大臣の定める者を含む。)が、卒業の要件として当該大学の定める単位を優秀な成績で修得したと認める場合には、同項の規定にかかわらず、その卒業を認めることができる。」および「学校教育法等の 1 部を改正する法律案に対する附帯決議」の第 2 項「3 年以上の在学中で大学の卒業が認められる在学期間の特例については、例外的措置である本制度の趣旨を踏まえ、導入の前提となる厳格な成績評価等、実施に当たっての要件を明確にするなど制度の適正な運用が確保されるよう努めること。」を踏まえる必要がある。(下線は引用者)
- ② 委員会は三年次卒業生が毎年認められるような事態を到底想像し得ない、すなわち、本カリキュラム実施後の本学部生の学修状況から推測し、とくに優秀な学生を対象とするものであると判断する。
- ③ 提案カリキュラムは、修業年限 4 年を標準的に想定し、その期間でしかるべき内容とトレーニングの教育を行うことを意図している。
- ④ したがって、三年次卒業は、卒業単位数等を 3 年次までにカリキュラム上比較的容易に履修することが可能で、これを

「優秀な成績」で修得した場合に特例的として専門ゼミⅣの履修を認めれば充分であると判断する。

- ⑤ しかし、その判断基準等は本委員会の権限を逸脱するので、向後の教授会審議に委ねる。
- 8) 業研究等の特殊な科目を除き、各科目を半期 2 単位で構成する
- 9) 資格等の拡大について
  - ① 教員免許教科「情報」について
 

現在社会情報学部学生が取得できる教員免許教科は中学校教科一種免許状「社会」と高等学校教諭一種免許状「公民」だけである。学習指導要領の改訂に伴い、2003(平成 15)年から高等学校で普通教科「情報(A, B, C)」が必修化されるのを機会に、この科目の免許取得可能性について検討した。しかし、現在文部省の「情報」教員養成方針が以下のとおりであるため、見送らざるを得なかったが、今後の検討課題である。

    - i) 高校普通教科「情報」と高校専門教科「情報」の教員免許を一本とする。
    - ii) 必要教員数を普通教科「情報」約 6,000 人、専門教科「情報」約 3,000 人、合計 9,000 人を見込む。
    - iii) 現職教員に平成 12 年度から 3 年計画で 3,000 名/年に 15 日間の研修を実施し免許を付与する。
    - iv) 文部省は「情報」教員を大学の理工系情報学科を中心に養成して行く意向との情報を得ているが、教員免許法の改正は遅れている。
  - ② 社会調査士について
 

社会調査士は、現在社会的に必ずしも認知されていないが、以下の理由により学内の資格として積極的に推進、奨励する：

    - i) 本学部学生が、社会調査等をとおして社会学を実践的に学び、資格取得を目指すことは学生の関心および教育的効果を高める。

- ii) さまざまな組織で調査等に基づく企画・政策立案の必要性が認識され、そのような問題発見、解決能力を身につけた人材が社会的に求められている。
- iii) 日本の社会系学部で社会学研究者に加え、データ解析、情報系メンバーが揃っている中で社会調査、データ解析およびその実践を学ぶ環境は極めて限られている。本学部はそのような数少ない学部の一つであり、この環境を生かすべきである。

## 9 カリキュラム実施上の留意事項

上記カリキュラムの実施細則等を審議することは本委員会の権限を逸脱するが、カリキュラム審議、編成方針等に照らし、留意すべき事項について列記する：

### 1) トピック科目の扱い

旧カリキュラムとの関係でトピック科目を当面提案のとおり配置せざるを得ないが、移行終了後に2-4年次への配置、科目等を見直すべきである。

### 2) 年間履修単位数の上限設定

3年で総単位数126単位を履修すると、1学年平均42単位である。一方、履修例に示されるように多い場合48単位くらい履修する必要があると思われる。それ以上履修することは演習重視の観点からも適当ではない。したがって、上限を46単位前後くらいに限定すべきである。

### 3) 科目群別履修単位数の縛り

学生諸君がある程度自分の好み等で選択が偏ることは避け難い。しかし、著しく偏るのは本学部の教育目的に反すると思われる。したがって、次のような比較的ゆるやかな縛りを設けるの適当である：

- ① 社会情報学／現代社会論／情報システム群から 8科目 16単位以上
- ② データサイエンス／フィールドワー

ク／データベース・マルチメディア／情報ネットワークシステムから 8科目 16単位以上

### 4) 既履修科目への配慮

入学生の多様化に伴い、既履修科目に差が出ている。とくにスキル重視のコンピュータ関連科目では教育的見地から、学年配当にとられず、より進んだ科目の履修を認めるなど柔軟に運用する必要がある。例えば、そのような学生に1年次から「プログラミング・同演習」の履修を認めるなど。

### 5) 卒業研究の指導教員について

これまでの議論では、卒業研究の指導教員が必ずしも専門ゼミナール教員でなければならないわけではない。

### 6) 担当持ちコマ数

カリキュラムを現有専任教員で担当するとすれば、その持ちコマ数は(卒業研究を含め)6コマ(半期科目12コマ相当)程度になると予想されることを付記する。



## 10. 付属資料 カリキュラム改訂に伴う学生意識調査 結果について

カリキュラム検討委員会では、学生の意見を把握し今回のカリキュラム改訂の参考にするために、「カリキュラム改訂に伴う学生意識調査」を実施した。調査は、①社会情報学部に入學する際に期待していた点、②現行カリキュラムや講義内容に関する意見・要望、③社会情報学部に対するイメージ、という3つを柱として行った。設問は、すべてフリーアンサー型質問を用い、学生に自由に回答してもらうことで、学生の意見を大づかみに把握することを目指した。

調査は、1999年9～10月に、各学年の必修の講義の時間に実施した。回収数は、504(1学年113人、2学年162人、3学年147人、4学年82人)、回収率は51.5%であった。

ここでは、調査結果の概要とカリキュラム改訂の際に考慮した点について述べていく。

### 1 調査結果の概要 (付録資料参照)

#### 1. 社会情報学部への期待と現実

(1)まず、社会情報学部に入學した時に期待したことがあったかどうかを尋ねた。各学年に1～2.5割はそもそも入學時に期待するものは何もなかったと答える学生がいる。その一方で、多少なりとも期待するものがあったとする学生の多くは、「パソコンの技術を身につけ、使いこなせるようになること」と回答している。情報＝「パソコンを使いこなすこと」というイメージが強いようである。さらに、単に、パソコンを使いこなせるようになることだけではなく、情報処理関係などの資格を取得することを望んでいる学生も少なからず存在する。その一方で、社会科学と情報科学の視点をあわせもつ社会情報学を学ぶことを期待して入學した学生は極めて少ないという結果になった。

(2)次に、1、2年生に対しては「期待した

ことがこれからの大学生活で実現できると思うか」、3、4年生に対しては「期待したことがこれまでの大学生活でどの程度実現できたと思うか」という質問を行った。

1、2年生の場合、1年生は実現可能だという学生が多数を占めるのに対して、2年生になると実現することは難しいと考える学生が増加する結果となった。実現不可能とした主な理由は、「プログラミングの授業が難しく分からないから」、「コンピュータを使う授業が少ないから」というものである。1年生の時は、情報処理でパソコンの基本的な操作を学び実現可能であると感じた学生のなかに、2年生のプログラミングでつまずき、実現が難しいと感じるようになるものがあると考えられる。また、「コンピュータを使う授業が少ない」という問題点の指摘は、これ以降の質問でも多く指摘されており、改善が必要な問題点といえる。

それでは、3、4年生の場合はどうであろうか。約半数の学生は「ある程度実現できた」と回答しているが、「十分に実現できた」という学生は極めて少数に過ぎない。ある程度という意味は、「インターネットやEメールは使えるようになったが、プログラミングは駄目」、「初歩的なものはできるが、システム設計・開発はまったくわからない」というものである。この「ある程度」という言葉に込められている現実には、大きな個人差があるものと思われるが、少なくともとことん使いこなせるようになったと感じている学生はわずかしかないということは確かである。

さらに3、4年生には、「実現できていない」と感じている学生が4割程度存在する点にも留意する必要がある。その理由としては、「機種が途中で変わってしまった。wordやexcelの使い方が学べなかった。」というこの学年ならではの回答が見受けられる。その他に「パソコンの授業が少なすぎる」「実習室が自由に使えない」など、パソコンを使う環境を問題

にする意見が多くなっている。その一方で、「自分が努力しなかったから」というように本人の取り組む姿勢を問題点としてあげる学生もいる。

(3)大学生活もすでに後半に入っている3, 4年生に対しては、「社会情報学部で何を身につけることができたか」という点を尋ねた。両学年の2割前後の学生は、「大学で身につけたものは何もない」と答えている。「身につけたものがある」という学生については、「パソコンの使い方やコンピュータの基礎(例えば、ブラインド・タッチ、インターネットのやり方、ハードウェア、ソフトウェアの知識、トラブルシューティング、C言語のごくさわりなど)」と回答した学生が圧倒的多数を占める。

また、少数ではあるが、「自分のなかで疑問をもつ大切さ」「社会についての問題を感じることができるようになった」「生きる姿勢」「考える力とそのおもしろさ」「新しい時代に対応する柔軟性」などと回答する学生もおり、それは特に4年生にみられた。

## 2. 現行カリキュラム体系や講義内容に関する意見・要望

### (1)カリキュラム体系に関する意見・要望

カリキュラム体系に関しては、講義の選択に柔軟性が欠ける点が多く、学生によって指摘されている。特に、必修科目が多すぎる点、それと裏腹の関係として選択の幅が狭いという点があげられている。選択の幅という点では、「社会系の講義が多すぎる」という意見と「社会系の講義をもっと増やしてほしい」というまったく正反対の意見が出されている。これは、関心のある学生にとっては物足りず、関心がない学生にとっては多すぎると感じるような状況にあることを意味しており、やや中途半端なカリキュラムになっていることの現れと思われる。また、受けたい講義があっても必修科目と重なると取れなくな

るため、その点に対する不満の声も聞かれる。特に、資格取得を目指す学生にとっては、必修科目と選択必修科目と資格関連科目があるために重なりが大きく、必要な科目の履修が思うように進まないという問題が指摘されている。さらに、情報処理関係の資格を取得できるような講義を設けてほしいといった要望も比較的多くみられた。

その他、少数意見として、①3, 4年生まで履修できない科目があるのはおかしい、②卒業論文はいらさない、③単位の上限を作らないでほしい、④社会系と情報系を早い段階で分けた方がよい、といった意見が目をつけた。

### (2)講義内容に対する意見

講義内容に関する意見として圧倒的に多いのは、やはりパソコンを使う実習や講義が少ないということである。入学時の期待が「パソコンを使いこなせるようになること」という点にあるだけに、現行の週2コマ程度の実習では物足りないと感じているようである。次いで多い意見・要望は、講義の仕方に対するものである。とりわけ、パワーポイントの使用に対しては、「スクリーンが小さくてみえにくい」「目に悪い」「ノートが取りにくい」などという不満の声が多く聞かれた。とくに「スクリーンが小さい」という点に関しては、補助スクリーンを付けるなどの設備改善を早急に行う必要があると思われる。その他には、「内容が聞き取りにくい講義はやる気をなくす」「情報処理などは能力別にすべきだ」「コンピュータのOSなどを最新のものにしてほしい」という意見が出されている。

また、講義内容そのものに対する不満の声も多い。「講義の目的、主旨がわかわない」「難しく理解できない」「学生のニーズに合っていない」「実際に使えることを教えてほしい」など、厳しい注文が出されている。

## 3. 社会情報学部に対するイメージ

最後に、「社会情報学部はどんな学部です

か」と問われたときに、どのように答えるかという点を尋ねてみた。この設問にたいする回答には学年による違いが見られた。1, 2年生では、「コンピュータを習う学部」といった回答がかなり多数を占めるのに対して、4年生になるに従い、「社会系と情報系の両方を学べる学部」という回答が増加しているこれは、就職の面接対策の結果としてみることもできるが、やはり3年生になり専門科目が増えたり、ゼミが始まることにより、学部に対するイメージが変化してくる面もあると思われる。

ただし、社会系と情報系の両方が学べるということが、必ずしもプラスに評価されているわけではない点には留意する必要がある。「中途半端な学部」「目的がはっきりしない学部」「エキスパートにはなれない」といった回答が相当数見受けられた。

少数意見としては、「比較的自由な学部」「けっこういろいろやるので、自分のやりたいことを見つけない人にはいい学部」といったプラスの評価がある一方で、「入っても役に立たない学部」「学費だけが高い学部」といった厳しいマイナス評価も目に付いた。とくに、「札幌学院大学で一番頭が悪い学部」という回答が、極少数ではあるが全学年でみられた点は、学生間の序列意識を示すものとして心に留めておく必要があろう。

## II. カリキュラム編成の際に配慮した点

カリキュラム検討委員会では、以上の調査結果を踏まえ、カリキュラムの編成を行う際に特に次の諸点に配慮した。

(1) 2年次以降にコンピュータ実習/利用科目を多く配置する。

学生の要望として最も多かったのは、コンピュータを使う講義・実習を増やしてほしいというものである。委員会では、その点に配慮し、2年次以降にコンピュータ実習/利用科目を多く配置することを心掛けた。

また、1年次の実習科目の増加については、入学時に一定の水準に達している学生には、学年配当にとらわれず、上の学年で開講される科目の履修を認めるなどの方向で対応することにした。

(2) 講義の選択の幅を広げる。

現行のカリキュラムは、必修科目(選択必修科目を含む)が多く、その一方で選択科目が少ないため、学生自身が講義を選べる範囲がかなり限定されており、その点に不満をもつ学生が多い。そのため、必修科目を大幅に減らし、選択科目を増やすということを行った。学部必修科目は通年15科目66単位から半期12科目24単位へ減少したのに対して、開講される選択科目は通年11科目44単位から半期90科目180単位に増え、学生の選択の幅は著しく広がっている。

(3) 能力や興味に応じたレベルの講義を選択できるようにする。

現行カリキュラムでは、必修科目が多いこともあり、全員が同じ内容の講義を受けることが前提となっている。そのため、意欲や力量がある学生には物足りず、そうでない学生には難しすぎるという状況を生み出していた。それは、「中途半端な学部」「エキスパートにはなれない」といった学生の声に現れている。そこで、講義を積み上げ方式にし、意欲や力量がある学生は3, 4年次に専門的な内容の講義が履修でき、それ以外の者は基礎を中心に学ぶことができるようなカリキュラムにすることを試みた。

(4) 講義内容の理解を助ける講義方式を採用する。

もっとわかりやすい講義にしてほしいという学生の要望も多い。そのため、教育効果を上げる1つの方法として、講義と実習をワンセットで受講できる方式を採用した。講義を一方向的に受講するだけではなく、それを実習で学ぶことを通して、学生の講義内容の理解が深まるものと考えられる。

(付録資料)

カリキュラム改訂に伴う学生意識調査結果の概要

社会情報学部カリキュラム検討委員会

実施年月日 1999年9～10月

対象者 社会情報学部全学生

回答者数 504人

内 訳 1学年：113人，2学年：162人，  
3学年：147人，4学年：82名

◎かなり多数意見 ○比較的多い意見  
●少数意見 ▲極少数意見

### I. 1, 2学年調査結果

Q 1. 社会情報学部に入學する時、「期待したこと」や「身につけたい」と思ったことはありますか。

A. 入學時点で学部に対する期待を何ももっていない学生が1, 2割存在する。

なし，無記入 1学年 23人 (20.4%)  
2学年 22人 (11.4%)

B. 多くの学生は，入學時にパソコンの知識・操作を身につけたいと思っている。

〈意見〉

◎パソコンの技術を身につけたい。パソコンを使いこなせるようになりたい。

○いろいろの資格を取ること。情報処理関係の資格をとること。

●社会学の勉強。社会に関する広い知識，常識を身につけること。

▲社会学と情報学双方にまたがった充実した講義

▲楽しいキャンパスライフ，友達づくり

▲四年生大学卒業という資格

SQ) 1. で「期待したこと」「身につけたいこと」があった人にも質問  
これからの大学生活でそれを実現できると思いますか。

A. 実現可能だと思う学生が半分以上を占める。

〈理由〉

○環境が整っているから。

○すでに身につけてきている。

○本人の努力，やる気次第でできると思う。

B. 実現不可能とする学生は3分の1程度を占める。とくに2年生になると不可能だと思う学生が急増する。

〈理由〉

○プログラミングの授業が難しい，分からないから。

○コンピュータを使う授業が少ないから。

○コンピュータを持っていないから。

●資格がとれるカリキュラムになっていないから。

▲楽しくないから。

Q 2. 社会情報学部の現行のカリキュラム体系や講義内容について、「不満に思う点」や「改善が必要と思われる点」があればお書き下さい。

A. 「カリキュラム体系」に関しては次のような意見がみられた。

〈意見〉

○必修科目が多すぎる。

○授業の重なりが多い。必修科目と選択必修科目や資格関連科目が重なる。

○もう少し選択の幅を広げてほしい。講義の種類を増やしてほしい。

●1講目と5講目に(必修)講義を入れない

でほしい。

- 取りたい科目が取れない。3, 4年になるまで取れない科目があるのはおかしい。

▲他学部の講義を受けてみたい。

B. 「講義内容」については、パソコンを使う実習の講義を増やしてほしいという要望が多い。

〈意見〉

◎パソコンを使う授業を増やしてほしい。実習の時間が少ない。

○パワーポイントが見えにくい。スクリーンが小さすぎる。→設備改善の必要性

○声が小さく、早口、ゴニョゴニョと話す講義は疲れて、やる気をなくす。

○講義の目的、主旨がわからないものがある。

○講義が難しく理解できない。

○興味が湧く講義が少ない。私たちのニーズに合っていない。

○課題など、負担が大きい講義がある。

●講義内容が講義名にそぐわない講義がある。

●もっと実用的な内容にしてほしい。あまりにも専門的すぎる。

●社会系も情報系も中途半端。

●ゼミ内容を充実してほしい。

Q 3. 「社会情報学部はどんな学部ですか。」と問われたとき、あなたはどのように答えますか。

A. 「コンピュータ関係を学ぶ学部」と答える学生が半数近くを占める。

〈意見〉

◎コンピュータを習う学部、コンピュータ関係を中心とした学部

○社会学と情報学を学ぶ学部、理系と文系を足して2で割ったような学部

○理系や文系といった分野にとらわれず、幅

広い知識や技術を身につける学部

○目的がはっきりしない学部。実際聞かれたとき答えられなかった。

●あまり意味のない学部、入っても役に立たない学部

▲テストが少ない学部、忙しい学部、なんでも有りの学部

▲思ったよりパソコンを使わない学部

▲札幌学院大学で最もレベルが低い学部

## II. 3, 4 学年調査結果

Q 1. 社会情報学部は何を期待して入学しましたか。

A. 入学時点で学部に対する期待を何ももっていない学生が2~2.5割存在する。

なし、無記入 3 学年 29 人 (19.7%)

4 学年 20 人 (24.3%)

B. 多くの学生は、入学時にパソコンの知識・操作を身につけたいと思っている。

〈意見〉

◎パソコンの技術を身につけたい。パソコンを使いこなせるようになりたい。

○文系と理系のいいところを学べると思った。

●就職に有利だと思った。

SQ) 1. で期待したことがあった人にお伺いします。

これまでの大学生活でそれはどの程度実現できましたか。

A. ある程度実現できたという学生が約半数を占め、十分実現できたという学生は極少数にすぎない。

〈理由〉

○インターネットやEメールは使えるように

なったが、プログラミングは駄目。

- 情報処理やプログラミングなどはある程度できるようになった。
- 専門分野が多すぎて理解することが困難になったため。
- 資格取得をめざしたカリキュラムになっていない。
- 初歩的なものはできる。システム設計・開発はまったくわからない。
- 仕事に活用できるまではいかない。

B. 実現できていないという学生も4, 5割存在している。

〈理由〉

- 機種が途中で変わってしまった。word や excel の使い方が学べなかった。
- パソコンの授業の数が少なすぎる。
- 実習室が自由に使えない。
- 講義、実習の主旨が分からない。おもしろくない。
- 自分が努力しなかったから。
- 社会系の講義が多すぎる。
- 課題はこなすことができてもそれを発展させる能力はない。

Q 2. 社会情報学部で何を身につけることができましたか。

A. 3, 4年生の2割前後は大学で身につけたものはなにもないと答えている。  
なし、無記入 3年生 35人 (23.8%)  
4年生 15人 (18.3%)

B. 大学で身につけたものとして、コンピュータの基礎的な操作をあげるものが圧倒的に多い。

〈意見〉

- ◎パソコンの使い方、コンピュータの基礎(ブラインドタッチ、インターネットのやり方、

ハードウェア、ソフトウェアの知識、トラブルシューティング、C言語のごくさわりなど)

- 自分のなかで疑問をもつ大切さ。社会についての問題を感じてできるようになった。
- 生きる姿勢、考える力とそのおもしろさ、新しい時代に対応する柔軟性
- ▲資格を取ったこと
- ▲少しの文章力、社会生活における人間の心理
- ▲メディアによる様々な問題点、調査実習でアンケートの取り方
- ▲世渡り、忍耐、責任をもつ重要性

Q 3. 社会情報学部の現行のカリキュラム体系や講義内容について、「不満に思う点」や「改善が必要と思われる点」があればお書き下さい。

A. 「カリキュラム体系」に関しては次のような意見がみられた。

〈意見〉

- 必修科目が多すぎる。
- 必修科目と重なり、履修したくてもできない場合がある。
- 選択必修の選択肢を増やしてほしい。
- 資格取得ができる講義を設けてほしい。資格取得に関する情報を提供してほしい。
- 卒論はいらない、無意味。
- 選択専門科目を2年生から履修できるようにしてほしい。
- ▲社会学系の講義が多すぎる。
- ▲社会系の専門科目をもう少し増やしてほしい。国際関係や女性学など。
- ▲単位の上限を作らないでほしい。
- ▲社会系と情報系は早い段階に分けた方がいい。
- ▲調査実習は必修科目ではなく、選択でいいと思う。

B. 「講義内容」については、パソコンを使う実習の講義を増やしてほしいという要望が多い。

〈意見〉

- ◎パソコン実習をふやしてほしい。2, 3年次にも実習がほしい。
- パワーポイントばかり使う講義はやめてほしい。目に悪いし、ノートがとりづらい。
- 情報処理などは能力別にすべき。
- 講義の内容が専門的すぎて学生には伝わらない。専門用語を初めから使う。
- 講義の目的や意図が不明確な科目がある。
- 言語の授業は中途半端。実際にプログラミングができるようになる授業が必要。
- 現実でもっと実際に使えることを教えてほしい。
- 講義の内容が同じに感じられる。
- ▲エキスパートにはなれない。
- ▲毎時間のレポートがきつい。
- ▲パソコンを一人一台ほしい。
- ▲コンピュータのOSなどをできるだけ最新のものにバージョンアップしてほしい。
- ▲社会系と情報系との講義の接点が少ない。

Q 4. 「社会情報学部はどんな学部ですか。」と問われたとき、あなたはどのように答えますか。

A. 3, 4 学年になると、「コンピュータを学ぶ学部」というよりも、「社会系と情報系が両方とも学べる学部」と答える学生が多くなる。

〈意見〉

- ◎社会系と情報系が両方とも学べる学部。
- コンピュータを学ぶ学部。
- 中途半端な学部。
- 札幌学院大学で一番頭が悪い学部。
- 学費（だけ）が高い学部。
- 比較的自由な学部。
- ▲毎時間のレポート提出が多い学部。
- ▲将来、コンピュータ関係の仕事に就きたいと考えるのであれば是非入学を勧めたい。
- ▲自分でやりたいことを見つけない人にはいい学部。けっこういろいろ勉強するから。
- ▲単位を取るには苦労しない学部。
- ▲就職活動中、もっとも困った質問の1つ。四年生なのによくわかりません。